

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

| | |
|------------------|---|
| Title | Bertha M. Clay作Between two sins翻訳(下) : 尾崎紅葉作『不言不語』の原作として |
| Sub Title | |
| Author | 堀, 啓子(Hori, Keiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 1997 |
| Jtitle | 三田國文 No.26 (1997. 9) ,p.69- 98 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.19970900-0069 |
| Abstract | |
| Notes | 資料紹介 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970900-0069 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Bertha・M・Clay 作 *Between Two Sins* 翻訳(下)

——尾崎紅葉作『不言不語』の原作として——

堀 啓子

Between Two Sins の後半の翻訳を本誌前号(『三田國文』第25号)に引き続き、掲載する。(ほり けいこ)

第X章

「ケイト、人間の我慢には限界があるのですよ!」と、私の恋人は苛々と叫んだ。「何と狭い限界ですこと!」と私は言い返した。「貴方は全くこらえ性の無い方ですね、ウリック。」浅黒い顔が微笑した。「本気ではありませんね、ケイト。貴女のことを考えると、私は……」二度と私にキスしてはいけませんわ、ウリック、決心しましたの。きつと昨日、庭師が貴方を見ていましたわ。」「それが好きなら、彼はまた私を見ることにならうでしょう!」と、ウリックは笑った。「結婚しようとしている相手にキス出来ない男は誰にキスすればよいと言うのです?」其の瞬間には私に答えられない問題であった。「二人が同じような考えを持つべきだなんて、おかしいことだ!人間の我慢には限界があつて、こんな状態にはこれ以上耐えられないと言お

うとしたところだったのに。」こんな状態、と言うのが私達の婚約について沈黙を守ることであるのは私にはよく分かつていたが、それについては話したくはなかった。六月末の輝くような朝であった。私の恋人は、彼の美しい頭と浅黒く端正な顔に神の御加護を! —煙草を吸いに胡桃の木の下に来ていた。勿論、私も彼に付き従わねばならなかった。ルドルフ卿はウラゲールに馬で出かけていたが、ウリックは同伴を断っていた。「我々だけのちよつとしたピクニックに出かけましょう、ケイト。私が葉巻を一二本用意し、貴女はちよつとした果物でも携えて。素晴らしい時間が過ごせるでしょう」と、彼は言った。反対することも、ひどく偽善的に構えて断ることも馬鹿げていた。と言うのも、彼と共に過ごすことよりも素晴らしいことなど私には無かったからだ。「私が奥様の御相手だと言うことをお忘れですか?」と、私は言った。「貴女は私の連れなのですし、相手がレディー・カルモアであろうと他の誰であろうと私は貴女を諦めませんよ」と、彼は答えた。

彼は私にとても居心地の良い席をしつらえて、豊かに熟れた

苺や紫の葡萄などの果実を私の手が楽に届くように置いてくれた。「後はじつと座って、貴方の魅力的な様子を私に賛美させてくれるだけです、ケイト。自分がこの朝そのもののように見えることに気付いていますか？ 貴女の瞳はとても明るく、貴女は最も上品な色彩をまとっています。貴女の髪は、——なんと黒々としていることか——全てがカールして波打っている。全くのところ、私は未来の妻に、今まで以上に恋をしている！」彼は私の側に跪き、私の手や唇にキスし、あらゆる愛称で私を呼んだ。彼がこういう調子でずつと私を愛してくれるのか、それとも旦那様と奥様との間に訪れた冷たさよそよそしさが私達の間にも訪れることになるのか、私はしばしの間考えた。

「何か不快なことを考えていますね、ケイト。貴女の表情から分かります。」私はため息をついた。「私は貴女のため息をつかせたりしませんよ。微笑みとキスの為に創られた貴女のような唇がため息をついてはならないのです」と、彼が言った。ああ、楽しく陽に溢れた時間は言葉にし尽くせないほど甘く、それは何と経つのが早い、至福のときであったことか！「私は限界に來たと言っていたのですよ、ケイト。私のように貴女を愛していないながらも自由にそれを表し得ない者にとつて愛は拷問なのです。昨夜、歌っていたときの貴女はあまりにも魅力的だったので貴女を腕に抱き締めキスしてしまいましたが」と、彼は繰り返した。奥様が何と思われたらどうかと考えながら「そうならなくてよかったですわ」と私は答えた。「ほんの少しの間、婚約に慣れたいので黙っていて欲しいと言いましたが、もう慣れましたか？」私は幸福な眼差しで彼の顔を見上げ、これ

はあまりにも大きな奇跡なのでもし一世紀生きたとしても最高の驚愕の原点に変わりないでしょう、と話した。「それでは明らかにこれ以上待つことは無意味です。今夕にでも母に連絡させてもらいましょう。秋には貴女と結婚したいのです。涙を浮かべているのですか、ケイト？」「ええ、喜びの涙です」と私は答えた。「とても幸せです、ウリック、世界中に私ほど幸せな娘もいなかったでしょう。でも、私達を取り巻く秘密を忘れることは私には出来ません。奥様があれほど惨めな様子ではなく、旦那様が貴方のようにであったならば、気にするはずはありません。奥様にお話すればどういうことになるか、私には分かりません。奥様はお泣きになるか、聞くに耐えないような、あの恐ろしいことを仰るかで、旦那様は今まで以上に冷淡になられるでしょう。この戸外では、陽光の下で、川は輝き薔薇は咲き、全てが美しく、幸せを感じて愛を語ることは容易です。でもあの影の館では、御夫婦が温かい言葉を一言も交わされない、あの影を帯びた家庭では、どうしてそんなことが出来ましよう？ あの場所で愛を語れば影に覆い被られそうな気がするのです。」

彼の表情は深刻になり、眼から笑いは消えた。「分かりました」と彼は低い声で言った。「全く同感です、ケイト」少しあつて彼は続けた。「あのことについて貴女と話したくはありませんでしたが、何にあの二人を引き裂くことが出来たのでしょうか？ 何か知りませんか？」「全く何も。私ほど知らない者もいないでしょう」と私は答えた。「貴女が此処に來た時から、こんな冷たい状態だったのですか？」「ええ、自分の幸福な恋

愛について語るのを嫌いになったのはそのためです。」「これについては何も言わなかったが」とウリックは続けた。「あれほど衝撃を受け、驚かされ、鬱屈を感じたことはありません。ここで過ごした最初の晩はただ一過性のものだと思っていました。」「それがさえ私を脅かしました。しかしそれが何も変わらず和らぐこともない常の状態だと知ると、私は当惑しました。ケイト、貴女は知っていますか、彼らが一度は最愛の恋人同志でルドルフは彼女に夢中で、あまりにも美しく優美であった彼女は何処にいても追いかけていたことを？彼女はルドルフと結婚するためにイングランドでも最高の結婚相手である幾人かを振ってしまつたのです。」「では今は旦那様が奥様に厭きられたのでは？」と私は尋ねた。「いや、そうではありません。私は彼らを間近に観察し、…というのも物事に別の見方をもちますことなら私は何でもやってみたものですから…彼らの間には秘密がある、しかも其の秘密はネストに関わるのだという結論に達したのです。」「どんな性質の秘密だと思ひですか、ウリック？」「恐怖と萎縮が彼女の表情に見えますね」と私の恋人は答えた。「明らかに夫を恐れなければならないような何かを彼女は犯したのでしょうか。それがどんなことで有り得るのか、が私には不思議なのです。彼女はとても優しく、愛すべき人で、間違いを犯すとはとても想像できません。こんなやりかたで彼女に接するとは、きつと彼には深い訳があるのでしょうか。」「奥様は誰よりお気の毒です」と私は言った。「深く旦那様を愛されるあまりに、愛情と痛みが奥様の生活の全てなのです。」「だが私は」とウリックはゆつくりと言つた。「兄を最も

可哀相に思う。非常な苦惱が彼の表情に浮かんでいる。妻をあまりに愛し過ぎていたから、こんな風になつてしまう程に兄の心が壊れてしまつたに違いないと私には分かる。」「私は彼に、湖の側でどんな彼女の様子を見たか、芝生に顔を埋めて神に赦しを乞い、そして彼らが全て夫への愛のためだったことを話した。彼は暫くの間、黙り込んでいた。」「お二人を引き裂く秘密を暴こうとするなんて明らかに不名誉な行動でしょうが、一緒にして差し上げられるか、せめて普通の優しさで心遣いを再び持たせて差し上げられることが何かできるならば、やってみるだけのことはあります。」「それでもまだ、いつもは早口の彼は沈黙を守つていた。」「ケイト、カルモア夫人が『全ては彼のために』と言つたのは確かですか？」と、しばらく後に彼は尋ねた。」「二度ならず、百回も」と私は答えた。すると彼の顔は蒼白になつた。『全ては彼のために』と、彼は繰り返した。」「すると何か過ちを犯したのだがそれは夫のためだつた、と彼女が認めたことになる。」「それは私がいつも考えることなのです、ウリック。奥様が旦那様に何か良くないことをなされたのではないか、と。」「彼女に何が出来たというのだろうか？彼女はとても彼を愛していたから誰もそんなことは思ひもよらないはずだ」と、彼は続けた。「いいえ、心の中でだつて奥様は旦那様を裏切つたりなどなさつていませんわ」と私が言うと、浅黒い顔が青ざめた。」「ケイト」と、彼は重々しく尋ねた。」「カルモア夫人にどんなことが出来たか、想像してみたことがありませんか？」「一度も。奥様は誠実ですし、でなければ何か恥ずかしというような嘘をつかれたのでしょうか。」「だが何のために彼女は嘘

をついたのででしょうか？」と、ウリックは尋ねた。「彼らの愛情と結婚には何の秘密もなかったのですし、嘘は二人の間を裂いてしまう恥辱となったはずです。」「ウリック、率直に言えば、旦那様を愛し過ぎたあまりに奥様が間違いを犯されたとしたか、私には考えられません。他のどの点においても、奥様の御気質は申し分ありません。奥様が旦那様をとても愛していらつしやることは分かります。旦那様のために何かをなさつたのだと思います。旦那様のために不正をも正しいことと間違われてしまつたのか、とは想像できません。いいえ、ウリック、もつと言つてしまえば、奥様は旦那様を激しく愛し過ぎたために、旦那様のために不正を為し、それを正しいことだと思われたのだ、と私は信じています。夫への愛は彼女の生のほとんど全てなのです。」「ウリックはひどく憂鬱そうに見えた。「まあ、影が貴方にまでひろがって、」苦しそうに見えますわ。何なのですか？」と私は叫んだ。「恐ろしい考え、一誓つて言いますが、間違つた思い付きです。でもあまりにもひどい考えのせいで嫌な気分になつたのです」と彼は答えた。彼はまいつているように見えた。「何なのか言つてください」と私は求めた。「言えませんが、ケイト。例え自分の命を救うためであっても、私の心をよぎつた考えを口には出しません。」「蒼白になつただけでなく、彼の手は震えていた。それ以上彼に尋ねたくは無かつた。彼はいらいらと足を踏みならした。「杞憂なのに。私は何と愚かだつたのだ」と彼は叫んだ。「ふと思いついたあんな考えにとらわれすぎてしまつたのだ。これが私の職業の最悪の点なのです。我々は常に目的に没頭しますからね。ケイト、これでは我々の

ピクニックは台無しです。忘れましょう。」「

彼は明るく言つたが、無理なことだつた。彼は忘れられなかつた。彼が身震いするのを私は何度も見た。彼は立ち上がり、苦惱の色濃い表情で首を垂れ、腕を組んで湖の側を早く或はゆつくりと歩き続けた。本当に私達のピクニックは駄目になつてしまつた。私はとうとう彼のところに行き、その腕に手を掛けた。「許してください。私はつい恐怖にとらわれていました。お恥ずかしいことです。もう一つだけ聞かせてください。正義は正義です。彼女のうわごとと祈りの全てを通して、幼い子供が出てきたことはありませんでしたか？」「まあ、」私は驚いて思わず叫んだ。「奥様が恐れていらつしやるのはまさにそのことです。」「私が彼にその時起こつた情景を話すと、彼は釘付けになつた。「ああ、」彼は遂に言つた。「私は正しかつた。私が正しいことを全霊で確信した。ケイト、ピクニックは終わりです。館に戻りましょう。」「

第X一章

その時から、ウリックは人が変わった。あの暗い影、他の人々を覆つていたあの影が彼にも拡がっていた。彼は寡黙で、上空でそして陰鬱だつた。幾度か元々の彼自身に戻ろうと頑張つていたようだったが、いつも無駄に終わつていた。関わつた者全てを萎れさせる、ウラメールを覆う秘密は何だつたのか？何か幼児に関わることだが、奥様には小さな子供も幼い弟妹もなかつた。何がありえただろうか？ 考えるだけ無駄のようだつた。恋人の変貌を私はひどく悲しんだ。彼が私を愛さなくなつ

た訳ではないのは私にも分かつていた。だが彼は何かに心を奪われてしまっていた。私達の婚約を発表することを彼は切に望んでいたが、今や彼はそのことについて一言も口にしなくなっていた。秋に結婚することを彼は切望していたが、今では結婚について何も言わなくなつた。それでも私はそれが、愛の不足や愛情が薄れたせいではないことは、確信していた。

ある朝、それは鬼百合が咲き誇っていた7月の初めのことだつた―彼は見たこともないような悲しみの表情を浮かべて、考え込みながらポーチにたたずんでいた。私は彼の側に行き、両腕をその腕に絡めた。「とても哀しそうですね、ウリック」と私は言った。「あのピクニックの日以来、貴方は変わつてしまいました。私はどうしたら貴方の笑顔を取り戻せるのでしょうか?」「私がどうすべきか決心するまで耐えていてください、ケイト」と、彼は答え、「貴女は最も気高く無欲な女性の一人ですが、私の兄が子供を持たないまま世を去つたら、財産と称号が私のものになると考えたことはありませんか?」と、唐突に付け加えた。「いいえ、考えたこともございませんわ」と私は答えた。「そうなのです。もしルドルフに男の子が出来なかつたら私がウリック・カルモア卿になるのです。」と彼は悲しげに言った。とても重々しく、あまりにも悲しげに彼が語るのので私はこう言わざるを得なかつた。「業しそうには見えませんわ、ウリック。」「そうです。私は、―私は恐ろしい過ちが犯されたことを恐れているのです。もし：ああ、どうして口に出せようか?もし私が恐れていることが真実なら、私は財産も称号も相続するつもりはありません。むしろ辺鄙な森の奥に行き、そこ

で身代をつくるでしょう」と、彼は答えた。「それが何なのかは話して戴けないのですね、ウリック?」と私は尋ねた。「何の意味もありませんし、貴女の生活をつらいものにするだけです、ケイト」と彼は答えた。「貴女の言う通り、其の考えに取り憑かれてから私は変わつてしまいました。貴女にも迷惑をかけますね。」「ずつとつらく、陰鬱で、哀しそうなままだです、ウリック?」と私は尋ねた。「そうならないように望んでいます」とため息をつきながら彼は答えた。「いつ元の貴方自身に戻られるのですか、ウリック? 以前の貴方が一番好きです。貴方はあんなにも明るく、楽しそうで陽気でした。私の愛するあのウリックはいつ戻つてくるのでしょうか?」「このひどい疑惑が落ち着けば」と彼は答えた。「で、それはいつなのでしょう?」私は尋ねた。暫く黙つて立ち尽くした後で彼は答えた。「兄に話す勇氣が出来た時に。」「いつ勇氣が持てるのです?」と、少しあつて私は追いますが、「分からない。正直言つて分かりません。この私の恐ろしい疑惑が当たっていたらば、私達は此処でまず幸せにはなれません。もし違つていたら、こんな疑いを差しはさんだことに激怒するあまり、兄は私を決して許しはしないでしょう。私は機会を窺ねばならないのです、ケイト。」

その日遅く、旦那様は彼を書齋に呼んで、ブルック・ホールのさる改築計画を彼に示した。二人の間に在つたことを彼は全て話してくれた。「ウリック、来てこの設計図を見てくれ」と旦那様は言った。「ロンドンのミルソンから今朝届いたのだ。どう思うかね?」二人は其の紙の上に身をかがめた。意見はあ

まり合わなかつた。旦那様は一つの設計を好まれ、ウリツクは別のものを好んだ。「これに決めよう」と言つて旦那様はウリツクが好んだ方を指差した。「駄目ですよ」とウリツクは笑つた。「ブルック・ホールは兄さんのものなのだから。ルドルフ、私のじゃ無く貴方の趣味に沿つて改築しましょう。」「確かにブルック・ホールは私のものだ。だが私はそこに住む気は全く無い。最早私にとつてあそこは家ではない。私は此処を嫌悪し、二度と足を踏み入れるつもりはない。」「ブルック・ホールを嫌うつて！」ウリツクは叫んだ。「ああ、私は兄さんがあの場所を好きだと思つていただけだ?」「かつて僅かな間はそうだった。今は違う。」「どうして嫌いになつたのです、ルドルフ?」旦那様の顔は暗くなつた。「それは関係ないことだ、ウリツク。質問されるのは好きではない。物事の当然の順序として私が死んだらこのホールはお前のものになる」と旦那様は言つた。「馬鹿げてる!兄さん自身の息子や娘が出来るでしょう、ルドルフ。私は貴方のあとを相続したいなんて思つてもいない。私の仕事が私の天命だし、名を挙げたいと思つている。」「旦那様は両手をウリツクの肩に置き、顔をのぞき込んだ。「我々はお互い愛情を持つていたね、ウリツク?」「ええ、そして今後もずっと」とウリツクは答えた。「では私の息子や娘が私のおとを継ぐことはないと言う、私の言葉を信じてくれ。お前がブルックのウリツク・カルモア卿になるのだ。そしてお前が私よりは幸せな人生をおくることを心から神に祈つてゐる。」「でも、兄さんは幸福になれる全てを手にいれていたではありませんか」とウリツクは言つた。「表面きは確かに幸福だ。

誰もが心の内に秘密を抱え持つてゐる。私は今とは全く異なつた人生を夢見た、一どれほど夢想したかは神のみが御存じだが。」「そして二人は視線を合わせた。「昔、我々の間には何一つ秘密はなかつた」と、ウリツクは熱心に言つた。「兄さんが陽気で気楽な若い軍隊の大尉で、私が法廷弁護士として足掻いていた頃、お互いに考へてゐることを知つていましたね、ルー。私は兄さんのネストへの愛を知つていたし、兄さんは今ではもう見つけた私の理想を私がどんなに探し求めていたか知つていた。我々は、真の兄弟として、間に如何なる影も挟まず、愛情と忠誠と真実を以て心と心、顔と顔を向き合せて立つていた。ルー兄さん、今、我々の間に何があるのか言つてください。」「秘密だ」と旦那様は答えた。「それは分かつています。誰の秘密なのです?」とウリツクは返事をした。「私の秘密だつたならば、お前はずっと以前に知つたはずだ。他の人物に関わることで、私はそれを抱えてゐるのだ。」「私が信用できませんか?」と、ウリツクは尋ねた。「私は信用してゐる。だが其の秘密を共有してゐるもう一人の人物はそうは思わないだろう。知らないほうがずっといい。それは私の人生を暗くしたし、お前の人生もそうなつただろう。」「

「多分」とウリツクは答えた。「私は貴方を助けられると思ひますが。」「無理だ。救済など有り得ない。死ぬまで辛い忍耐が続くだけだ。だから私が神に乞ふことが出来る最大の慈悲は、私の命が早く天に召されることなのだ。」「今のようではなく、昔のように話をしてゐるので、もう一つだけ聞かせてください。兄さんとネストとの間にどんな問題があつたのです?」旦那様

は青ざめ、其の唇は震えた。「話すことは出来ない。話せるものならばそうしていた。」「貴方の人生に影を落とされたのと同じ秘密ですか、ルー？ 貴方の奥方と貴方の間に起こったことですか？」「そうだ」と、暫く後に彼は答えた。「同じものだ。」

「それでそれは未来永劫続くのですか、ルー？ もう昔の愛情をもつてネストをその腕に抱き、キスすることはないのですか？」

「二度と」彼は答えた。「決して。だから神よ、救い給え！」

「彼女は貴方が決して赦し得ない何かを犯したのですか？」

「そうだ」と彼は答えた。「他のどんな人間に対しても、私はそんな質問に答えたりしない」と旦那様は続けた。「お前に、弟にだからこまでも言えたが、これ以上は言えない。」

「では貴方の人生を駄目にしたこの恐ろしい秘密が何なのか、死ぬまで語らないつもりですか？」「そうしたいものだ」と彼は答えた。「誰にとつても良いことはなく、傷付けるだけだから。」

「親愛なるルー、これが賢明なやり方だと本当に思っているのですか？ 私がこう言うのは、好奇心ではなく兄弟としての愛情からです。貴方はこれに気付いていますか？ そんな重荷に長い間耐えられるものはいません。押しつぶされてしまいます。今、間に合ううちに、手を貸しましょう」とウリックは言った。

「お前には助けられない」と彼は陰鬱に答えた。「兄さんの全人生がこんな感じで、世間から隠され、影を落とされ、いや、更にひどく失われていく運命にあると、本気で言っているんですか？ 信じられないことだ。もし過失が犯されたのであれば、それを正しく直しましょう。」「決して正すことは出来ない」と旦那様は応じた。「それならば忘れてください。決して癒さ

れない悲しみを気に病んでみて何になりましょう？ ルー、勇敢に強靱になって踏み潰し、消してしまってください。この悲劇的な苦しみが何になると言うのです？ 終わりにしましょう。」「終わりは有り得ない」と旦那様は重々しく言った。「さあ、ウリック、これ以上この件について話すのはやめよう。」

「ルー、ネストのためにお願いさせてください。あれ以上不幸な人を見たことはありません。彼女を見ると心が痛みます。三年前の、よく笑う明朗な娘を思い出すと、自分の眼が信じられません。彼女は生きながら死んでいる女のようにです。少しでも不憫に思つてはくれませんか？ 努めて彼女を許してくれませんか？」「親愛なるウリック、好意は嬉しいが、お前には分からない。私を愛しているなら、これ以上は言わないでくれ。だから、この話は現状のままにしておく。」

その後、ウリックは目に涙を溜めて決心した。高貴で親切で優しい自分の兄がこんなにひどく苦しまねばならないと考えるのに耐えられなかった。それから数日後、ある朝私が書齋に行くと、窓辺に奥様が佇んでいた。ウリックがある手紙をそこで書いていたことを私は知っていた。私が入つていっても、奥様は動かなかった。私も彼女の邪魔はしなかった。私は自分の本を探して、彼女が私に話しかけてくるか、何か欲しがるか、私が彼女に何かしてあげられるまで、それを見て待つていた。私を振り向いたその白い顔を私は決して忘れはしない。「ケイト」と彼女は低い声で呼んだ。「こちらに来て。貴女が必要なの。」私は彼女の側に行つた。「ウリックの、私に対する態度が変わつたのに気が付いて？」と彼女は尋ねた。「いいえ」と私

は答えた。「彼はいつも奥様に好意的でしたし、今だってそうですわ。」「それじゃ私の考え過ぎに違いないわ。そうでありますように、彼は好奇の視線で私を見て、厳格に話しかけるようだと感じたの。」「それはお思い違いですわ。」「私は言った。」「そうしようとしたってウリックに厳格な話し方ができるとは

思えませんが。奥様、」私は唐突に付け加えた。「貴女の問題のどれくらいが幻想なのでしょう?」「全く幻想ではないわ」と奥様は答えた。「私の問題は充分過ぎるほど現実のものよ。何より耐えられないのはたまに目を覚ますと数分の間、自分で全ては夢だと信じてしまうことなの。次第に現実になっていくのを、どんなに私が恐れていることかノケイト、私はウリックが好きよ」と彼女は悲しげに付け加えた。「彼が私に冷淡になっていくのは嫌なの。」「どうして彼がそうなりましょう、奥様?」と私は尋ねた。「言葉には出来ないわ。でもルドルフの目にはしよつちゆう見るけれど、ウリックの目には嘗て見たこともなかったような私の嫌いな何かが、彼の目に浮かんでいるわ。」ウリックは、まだ私に話していない例の同じ思考か疑惑を抱えていて、彼の奥様に対する態度に影響を与えているのはそれなのかと、私は訝しんだ。

第XII章

その頃、ウラメールに一人の客があった。それはジョン・ソーンレイ牧師といって、何故赴任して来たのかは私には想像もつかなかったがウラデールの教区牧師であった。館中で、教会に通っていたのは私だけだった。召使達は一人残らず、執事さえ

も非国教徒だった。だがその牧師は教会を訪れるように説いていた。私は彼ととても良い友人になった。彼は好んで私に話しかけた。彼が私を愛している私の婚約を聞き及ばなければ求婚するつもりだったことは、後に知った。彼の妻は一人息子を産んだ時に亡くなっていたが、彼女のことを私に話すのは彼にとつて無上の慰めであるらしかった。たまたま旦那様と奥様と私が三人で居る時にこの牧師の訪問が告げられると、お二人は少しの間その場に同席された。そのことに彼は随分まごついていたのが分かった。別々には話しかけることが出来たが、お二人と一緒に会話に引き入れることが出来ないで、彼は当惑した視線をお一方からお一方へと泳がせていた。彼はお二人の生活している関係がこの上なく無味乾燥なものであることを知っていた。不必要な会話は彼らの間に一切交わされなかった。知らぬ他人同志でもこのご夫婦ほど冷たい関係にはなれなかったであろう。彼らの距離を近づけようとする自分の全ての努力が徒労に終わったことを彼は知った。彼はそれを苦にし、私と違つて決して慣れることはなかった。私は慣れていった。当初はひどく居心地が悪かったが、情性で、何の当惑も感じずにお二人同時に会話をつなぐことが私には出来るようになっていた。

その牧師には無理だった。彼は混乱し、お一人からもうお一人へと働きかけていたが、それは旦那様の頑固な冷淡さと奥様のひどい当惑とに行き当たつた。お二人のうち彼は奥様に好意的だった。奥様はいつも彼にとつても親切で、彼が必要としている時はいつでもその慈善事業を助ける用意があつた。

ある時、彼がこんなことを話しているところに私も居合わせ

た。「奥様、貴女はどんな教会にもお出でになつた事はないのですか？」そして彼女はこう答えた。「ええ、一度も。」この牧師はとても善良な人間であつた。彼は自らの職業を本心に愛しており、しかも賢明な人格者だつた。奥様がこう答えた時、彼はあまりショックを受けた様には見えなかつた。「御存じありませんか？」と彼は言い始めたが、奥様が遮つた。「ミスター・ソーンレイ、どうかその事について話をするのはやめましょう。私も一度は従つていました。全ての人はどこかの教会に通うべきだと確信していました。行かなくなつたのは私なりの訳であつたのです。御存じなのは神だけなのです。」そこで、彼は私を更に頼りに始めた。彼は旦那様と奥様について随分話をするようになった。彼は、お二人は彼が出会つた中で最も素晴らしい人達のうちに入ると言い、お二人の間のひどいよそよそしさを嘆いていた。彼らを知る人皆がそうであるように、彼も何がお二人をそうさせたのか、とても不思議に思つていた。彼はお二人の眞の友人であり、秘密があることを知つていて、我々に何か出来るかもしれないと言う希望について私達はいつも話し合つていた。だが暫し後、私はそんなことは出来そうもないと分かつた。出来ることなど何もなかつた。

この牧師は自分の幼い息子のことを決して飽きることなく、私に話していた。私はその子に会うために牧師館を訪れた。戻るや否や、私は奥様に彼の愛らしい幼い子供の事を話した。「ここを訪ねるように是非声をお掛けください、奥様。子供の存在と言うものがどんなに家を明るくするものか奥様にはお考えも及ばないことでしょう。こうしたお部屋は、中で子供が遊

んだり、笑つたり、泣いていてさえ、全く違つたものになるでしょう。彼に頼んでください、奥様」と私は言い、「きつと奥様を明るくさせ、楽しませてくれますわ」と頻りに薦めた。彼女は蒼白になつた、―あまりにも蒼白になつたので私は彼女が卒倒するのではないかと思つたほどだ。「ああ、そんなことをしたら私は死んでしまふ」と彼女は答えた。「愛らしい小さなウィリーのような男の子の訪問がどうして奥様を傷つてたりしましょうか？」と私はかなり驚いて尋ねた。彼女は答えなかつたので、私は更に続けた。「きつと、旦那様もお喜びになりませんか。」「いいえ」と彼女は叫んだ。「貴女はひどい間違ひをしている。それは……」そして彼女は急に言葉を止めてしまった。「いいえ、ミス・フォスター、もし私によくしてくれようと思ふのならどんな子供であつても決してウラメールには連れてこないで。」「子供がお好きではないのですか？」と私は尋ねた。「好きよ」彼女は弱々しく答えた。「全ての女性にとつて子供を愛するのは天性の一部ではないかしら？」「私には分かりませんが、奥様」と私は応じた。「私は子供が全く好きではない女性達に会つたことがありますし、知つてもいますから」そうして私はこのアイデアを断念した。

数日後、私はこの牧師が援助を仰ぎに来た時に旦那様、奥様と共に居た。牧師の来訪は、ある貧しい女性のためでその子供が重い病にかかり、牧師はその子供の苦しみを詳しく話していた。「貧窮のために、幼児が死の危機に瀕するとは、私にはとても恐ろしいことのように思えます。」彼は、私のように、お二人の表情がどんなに変貌したかを見ていなかつた。旦那様

は無情で冷淡に、奥様は時々彼女が見せていたあの恐ろしい当惑による疲れきった表情にと変わっていた。会話の流れを変えてしまおうべく、私は急いで割って入った。「貧しさのために子供が死に瀕することは、大人の場合ほど悪いことのように私には思えません。」牧師は首を振った。「子供の死に関しては私は一言も言っています」と彼は言った。危うくなりそうな会話を方向転換させようと考え、私は急いで言った。「貴方の御持論とは、ミスター・ソーンレイ？」「こういうものです、ミス・フォスター。成人男女の場合、彼らの能力の限界は見えていますし、どんな人々なのか正確に分かっています。例えば彼らは賢者かもしれないし、そうでないかもしれない。しかしもし子供が亡くなったらそれが世界にどんな損失を与えたかは知り得ないのです。例えばその子がミルトンやシェークスピアの卵であったのかも知れないのに。だから、子供の死は大人の死よりもはるかに悲しく感じられるのです。」この場合、この説には尤もな見解が含まれており、私は暫し、奥様のことを忘れて興味深く聞いていた。深いため息が私の注意を彼女に引き戻した。旦那様が死人のように蒼白になっている一方で、奥様は私達から顔を背け、嘗てどんな人間の表情にも見たこともないほどの苦悩の表情を浮かべていた。私は急いで、私は大人の命のほうに価値を見いだしていたので、それは私にとってとても新鮮な考え方だったと言ひ、教会の鐘を鳴らす係について用もない質問を牧師に問ひかけた。旦那様は出ていった。奥様は旦那様が退出された後、少しは楽に息が出来たよう、牧師は彼が望んでいただけの援助を受け取った。

次から次へと起きたことを考えると、例の秘密、悲劇、奥様の人生の謎が何であれ、幼い子供に関わるらしいことが、私にも見えてきたのだ。

第XIII章

間もなく、最も予期せぬ出来事が起こった。それは牧師が夕食に招かれたことだった。その事自体は大したことでもなく、まず書き留めおくようなことではないが、もつと大きな出来事を引き起こすことになった。招待はウリックの提案に相違なかった。旦那様は近所の人を招いた事はなく、奥様は誰かに会うことを恐れていた。ウリックは牧師と彼の子供にひどく嫉妬するように振る舞っており、そんなにも長身でハンサムな男性が嫉妬してくれる事をすばらしいことのように考えていた程、私が若く愚かであったと、言えるかも知れない。というのも、ある明るい朝、私がウリックと共に湖のほとりに立っていた時、あの牧師の来訪が告げられし時のことだ。旦那様も奥様も見当たらなかった。私は彼をもてなさねばならなかった。ウリックの表情は陰りを帯びた。「本当に貴女以外に客をもてなす者はいないので、ケイト？ あの牧師は貴女方ご婦人の所謂『あのハンサムな男性』といった具合の人ですね。あまり長く居ないでください。我々が共有するはずだった楽しい時間―水百合の間の湖面にボートを浮かばせる、暖かな日の素晴らしい景色を思っただけでいい。」彼の話が何なのか、聞かなければなりませんわ、ウリック」と私は抗議した。生憎、牧師はその日沢山の話を持ってきた。彼はウラデルの人々をひどく心

配していた。街はひどく不健康で、ルドルフ卿がその土地に多くの不動産を所有していたので、そのことについて彼は旦那様と差して話し合いを望んでいた。牧師が言うにはそれらの家の何軒かはあまりにもひどい建築で換気も為されていないので、住民が熱を出し、死に到るのは時間の問題だった。「私を人騒がせな人間だと思わないでください。」と彼は付け加えた。「でも、ミス・フォスター、もし熱病が蔓延したら、多くの人命に関わることになるのです。」私は彼に旦那様に会うように勧めた。

そこで彼が夕食に招かれることになったのだが、それはウラメルのお館では一つの事件であった。暖かい日であった。じつとりと重い薔薇の芳香で、空気は眩暈がするように感じられた。ジャスマインの小枝はそよとも動かなかった。その夕べ、奥様は一段と美しく見えた。彼女は緑の葉と長い草で縁をかがつてある白いレースのドレスを着て、髪にダイヤをきらめかせ、腕を横切るのもダイヤであった。彼女は常に夫の目を魅了すべく着飾っていたが彼の目が彼女にとどまることは決してなかった。恋人を喜ばせるために、私はスクエア・カットで短い袖の綺麗なばら色のドレスをまとった。彼が言うには私は美しく白い丸美を帯びた腕をしているので、それらを見せるようにと言うのだった。それらは賞賛に価すべきものだ、と彼は隠させようとはしなかった。

それはウラメルでおぼえている限り最も楽しい食事であった。客のある時、主夫妻の不自然な冷たさと沈黙はさほど目立たなかった。牧師はよく喋り、ウリックはここ暫く私が見ていたよりも上機嫌だった。突然――どうしてそんな話題になったの

かは思い出せないが――話題が死刑に移行し、牧師は例のよく知られている言葉「人間が為し得べき最悪の行為は絞首刑である」²を引用した。最初、旦那様も奥様も会話には参加していなかったことに私は気付いていた。旦那様はいつもよりも青ざめた顔で、奥様は美しい顔を不自然に赤らめて、黙って座ったまま聞いていた。ウリックは死刑執行に賛成の立場から、牧師は反対派として、熱心にこの問題を論じていた。「よく思うのですが」と牧師は言った。「命には命を³」というあの言葉には多くの解釈の余地があります。「故意に他人の命を奪った者は、その罪を自らの命を以て贖うべきだとは思われませんか？」とウリックは尋ねた。「思いませぬね」と牧師は答えた。「人間とは善意と悪意のないまぜになったあまりにも奇妙な存在です。私は人間の絞首刑には意味を見いだしません。無意味なことです。そのようなことで死者に生命を取り戻すことは出来ないのです。」「それは他の者達が同じ罪を犯すことを思い止まらせるでしょう」とウリックは主張した。「私はそうは思いません。人殺しをするような熱情に捕らわれているとき、人は最後の死刑執行を思うために立ち止まろうとはしないのです」と牧師は答えた。「意見が分かれましたね」とウリックは続けた。「気遣いじみた情熱の高揚によって命が奪われたときはほぼ殺人ではありません。落ち着いて、静かに熟考し、何度も考えた挙げ句に犯したとき、それを故意の殺人と呼びます。」その言葉は私達の耳に強く響いた。「殺人――恐ろしい言葉ですわ。まさにその言葉の響きは恐ろしいものですわ」と私は言った。「先日、不思議な話を読みました」と牧師は言った。「その話に私は随

分衝撃を受けました。ある男が自分の妻を殺害しました―状況や原因は忘れましたが、恐らく妻が彼を怒らせたか何かでしょう。当然のこと乍ら、逮捕令状が出たとき、彼は逃亡し警察はすぐに彼を追跡しました。彼は下町に隠れていましたが、その時、まさに彼が隠れていたその家から出火しました。気の毒な女性が上の階の部屋の一つで寝ており、彼女の悲鳴が聞こえました。自分の妻を殺害したこの男はあかの他人であるこの女性を助けるために一命を賭したのです。彼は炎の中に飛び込み、煙にまかれ、髪は根元から焼かれ、顔と手に火傷を負いながらも彼女を救助しました。彼女が神に祈りを捧げ、彼に感謝しているうちに警察が到着し、彼を逮捕しました。彼は警察にこう言いました。「貴方がたは妻殺しの簾で私を吊すでしょう。私が彼女を殺したのは彼女が私を怒らせたからです。でも私は後悔しています。」その場に居た誰かが「命には命を」という引用を口に出しました。『聖書の格言ですね。私は文字通りそれを遂げてしまいました。私は妻を殺しましたが、この女性を死から救うために自らの命を擲ちました。まさに命には命を、なのです』と例の男は静かに言いました。この不思議な話には私は胸をうたれたのです」と牧師は付け加えた。なぜか私は奥様の顔を見た。彼女の目は牧師に定められ、その唇からこぼれる一言一句に捕らわれていた。その瞳には以前見たこともないような不思議な光があった。「そうですね」とウリックは言った。「でもその男は間違いを犯しています。その字義の正しい解釈は他者の命を奪った者は自らの命でそれを贖え、というものです。」もし他人のために命が投げ出されたのならば、それが誰

の命であろうと何の不都合がありませんか？」と、奥様が割って入った。全員が驚いて見上げた。彼女のよく通る美しい声は部屋を震わせ、美しい顔は血の気を帯びていた。旦那様は驚愕して彼女を眺めた。彼女は続けた―「誰かの命を奪った者がまた別の者に命を与えたなら、帳消しになるのではありませんか？」彼女は尋ね、私はその声の中に何か自嘲的な苦さを感じとった。「奪われた以上に価値のある命が与えられたならば借りを返す以上にはなりませんか？」「いいえ」と、牧師は私達をはっきりとさせるような明瞭な声で言った。「いいえ。それは正しいことと間違つたことをはつきりと見分けられないねじけた心の視点です、奥様。」大風に吹かれたように彼女は縮み上がった。「なんと陰気な会話なのだ！」とウリックは突然叫んだ。「どうしてこんな話になったのだろう？こんな話題は止しましょう。義姉さん、貴女は我々のことをすっかり忘れておいででしたね」「私にはとても興味深かったのです」と言つた彼女の目には、再び、あの奇妙な光が瞬いており、その声には何か珍しい不思議な調子があった。長いその談議の間、御夫婦は殆ど視線を交わさなかつたが、「命には命を」という語について、奥様は視線を上げて夫の顔にひたと当てた。愛、後悔、希望といったそのメッセージが誰に読み得たというのか？

そうして夜が更け、牧師が帰宅すると、旦那様も慌ただしく挨拶をして出ていった。奥様はぼんやりとしているようだったが、窓へ歩み寄り、ブラインドを脇へ寄せた。彼女はそこに佇んで暗闇を眺めていた。「ケイト」と私の恋人が呼びかけた。「こちらへ。一緒に来てくれますね。」そして私達は薄明かり

の灯された温室へ入った。「ねえ」と、私を抱き締めながら「貴女の今夜の振る舞いはとても感心できるものでしたね」「私はいつもそうしていますわ、ウリック。」「貴女は一切あの牧師に迎合しなかった。私は考えを改めねばなりません。彼は良い表情をし、議論も上手い。ケイト、間違いなく彼は貴女を賛美しています。その腕輪は、貴女に合っていますか？」これは、私に腕を上げさせてキスするためのほんの言い訳であった。私は窓辺に佇む奥様を指した。「彼女から私は見えますよ」とウリックは言った。「それにも見られても構いません。ねえ、今夜椅子に座って貴女の美しい顔を眺め、私の愛するその唇にキスしたり、至福の喜びを私にもたらすその瞳に見入ったり出来ない間中、悩まされた幻想といったら、ケイト、私は償って貰わねばなりません。」奥様を指し示すことも、何か言ったりしたりすることも無駄だった。それに正直なところ、私自身あまり気にはしていなかった。「覚えておいてください」と、その端正な顔を赤らめて恋人は言った。「私が明日、兄に話すことを覚えておいてください。これ以上一日でも遅れたら耐えられない。」彼は普通の恋人らしく、おやすみの挨拶をし、立ち去った。それで私は奥様のところに近付いた。「あら」と彼女は言った。「どなた？」「どなたとは、どういうことですか？」と私は尋ねた。「自分の顔を見るべきよ、ケイト、自分の瞳を。横に並んで立っていると、貴女はまさに幸福そのものだし、私は悲哀そのままでわ。」私は自分を恥じた。幸福の輝きを自分の表情と瞳から消し去ればと願った。「命には命を」というあの言葉が頭から離れないの。ケイト、あれはなんて奇妙な会

話だったのでしょうか！と彼女は言った。「陽気でも、楽しくもなく」と私は答えた。「奥様、もし貴女だったら私は全て忘れてしまいますわ。」「出来るものなら」彼女は感情的に叫んだ。「自分の全て、自分の名前さえも忘れてしまえるのなら！」

第XIV章

翌日、ウリックは例の脅しを実行にうつす機会が無かった。何故なら牧師が話していた例の家々を見回すために、旦那様はウラデルに早朝から出かけたからだ。ひどい暑さだった。空は溶かした真鍮のようだった。白百合の花は落ち、薔薇は首を垂れた。鳥は葉の隠れ家に隠れ、湖には小波一つ立たず、この淀んだ暑さをやわらげる山からの風はそよめきもしなかった。「旦那様が今日、ウラデルにおいてにならないければよかったのに」奥様が言った。「あまりにも暑いし、あのひどい家々を出入りなさるのでしょうから。彼の身が心配だわ。何か哀しみが私に近付いて来る気がするの。」ウリックは笑った。「さあ、ネスト、そんなものはありませんよ。もう充分ひどい一日じゃないですか。我々には来るべき悲哀の虫の知らせなんてありませんよ。」「私には分かるわ。」彼女は青ざめ、唇を震わせながら言った。それは長い静かな一日だった。ウリックと私は杉の木の下で午前中を過ごした。幾度となく、たわいもない幸福な出来事を幕間にはさみつつ、彼は読書し、私は仕事をしていた。夜になり、旦那様は無事に戻った。日がな一日、旦那様を心配していたにも関わらず、奥様は旦那様を出迎えようとはしなかった。旦那様を目にした喜びを奥様は何も表しはしなかった。感

情を押し殺していたにも関わらず、旦那様へと向けられていた奥様の心は私には素通しであった。

夕食は全く盛り上がらなかった。空腹な人も無く、食事をとれる人は誰もいなかった。ウリックでさえ暑さにまじり、あまり話をしなかった。その後、客間で奥様は白いドレスのまま日陰に腰を下ろした。旦那様は大きく窓を開け、とぼりを押しやった。「少しでも風を入れよう」と旦那様は言った。「ケイト」突然、ウリックが叫んだ。「我々のために歌って下さい。先日、不思議な趣のある歌曲を手にいれて、家に持ち帰ったのです。」彼はそれをピアノに置き、私は歌った。その歌は「二つの絵」という題だった。

集められた影の中、私は座り、西方を見つめた。

夕暮れの中、見かけぬ画家の手が絵を描いていた。

私の魂が畏怖で充たされる奇妙な美しい絵、

誰も見たことの無い街に想いを馳せる。

「私を描いてください、ああ偉大なる芸術家よ。」

影が近寄り、燃え立つ西の丘の素晴らしい輝きを

掻き消そうとしたとき、私は叫んだ。

「私を描いてください、この天使の表情を！」

そして、ほら私の目の前に、天国に住む

私の亡き母の顔が浮かぶ！

「私を描いてください、この罪の顔を！」

暗い影があつた丘を覆い、黄昏の中、私は想う。

見慣れぬ画家が涙を流し、ほら、

あの魔法の筆先から忽ちに顔が現れ、

つみびとの哀しく白い表情、

私はそれが私の顔だと知っている！

白い両手が私の肩にかかり、涙ながらの声が囁いた――

「ケイト、私を愛していて？」「そうだと後承知ではありませんか、奥様。」「では、それ以上は歌わないで。私には耐えられない。嘗ては私も歌ったものだけ。私の声は、銀の鈴のように美しく澄んでいると言われていたわ。私は音楽を愛しているわ。」「奥様が歌っていらつしやるのは聴いたことがございませんわ」と私は言った。「私は一小節だって歌ったことはないわ：ここへ移り住んで以来」と彼女は答えた。「そしてこれからも歌うことは無いでしょう。」そうして、その夜は引き取った。

牧師はその日一日姿を見せず、幼いウィリーについて私も何も知らなかった。しかし翌朝、私達四人皆が朝食の食卓についていると、不思議なことに牧師の訪問が告げられた。彼は瞳に影をおいた、ひどく心配げな表情で入ってきた。そして挨拶もせずに押しつぶしたような声で言った――「幼いウィリーが重病にかかりました。」私達は皆、深く悲しみ、気の毒な牧師は胸がつぶれる想いのようなだった。「どうされたのです？」とウリックは言った。「子供のちよつとした病気を重く診過ぎるべきではありません。子供たちはある日、死に隣り合っているかに見えても、翌日は随分回復しているものです。」「ええ、それでもあの子は本当に重症なのです」と牧師は重々しく言った。「今朝早く、私は湖の西岸に住む気の毒な女性を見舞っていました。戻ってきた時、うちのあの子を診察されたジョンストン医師に出会い、あの子の病状が本当に重いことを告げられたのです。」

皆さんにお知らせして、誰かお館の人に私をおくってもらえるよう、お願いするつもりでした。私は大急ぎで牧師館に帰ります。」旦那様は御自身が運転していくことを申し出、私達は悲しみのうちに取り残された。

牧師館から私宛ての知らせが入ったのは、その夜丁度、夕食を終えた時だった。それは、幼いウィリーが悪性の天然痘に冒されているという恐ろしい知らせであった。乳母がウィリーを、天然痘で倒れた女性のいる家に伴い、そこで伝染したのだった。さらに牧師の苦悩を深めたことには、何が起きたのかを知った時、乳母は館から逃げ出してしまった。若いメイドもまた、自分の美貌を損なうことを恐れてすぐに逃げてしまい、年老いた家政婦の他に牧師の愛児に付き添う者が誰もいないのだった。私は声を出してこの手紙を読むと、椅子から身を起こした。

「奥様、私を牧師館に行かせて頂けませんか？ 私があの子を看ます。私は恐くはありませんし、小さなウィリーを愛しています。彼になくはならないのは看護です」と私は言った。ああ、彼女の美貌には先に触れた時と同じあの奇妙な光が、その眼には冴えた異様な輝きが、さしていた！「いいえ」と彼女は応じた。「貴女は行かせないわ、ケイト。もしそれが本当に悪性の天然痘なら、本当に伝染し易く、概して命取りなのよ。」力強い腕が投げ掛けられ、真実、愛を込めた胸に自分が引き寄せられるのを私は感じた。「貴女は好き勝手をして良い、貴女ひとりの身ではありませんよ。貴女は私のもので、私が貴女に行くことを禁じます。」私は泣きながらウリックに寄り添った。「あの幼い子が…あの子の許に私は行かなければ！」私は啜り

泣いた。「近付いてはいけない。貴女は私のものだ。その仕事を貴女より上手にこなせるよう、訓練を受けた賢明な看護婦がいくらでもいるのです。貴女の命を危険にさらさせるようなこととはしない」と彼は言った。私達は他の人の面前だと言うことを忘れていた。お互い以外の全てを忘れてしまっていた。

奥様の驚きの声が私を引き戻した。「ウリックノ…ケイトノ！」彼女は叫んだ。私の恋人は浅黒く端正な赤らんだ顔を上げた。「忘れていました」と彼は言った。「今朝お話ししようとしたのです。このことは何も御存じ無いですよ、ルドルフ兄さん、ネスト」——そんな瞬間でさえ彼が「ネスト義姉さん」と呼ばないことに私は気付いたのだが——「私はケイトを愛しており、彼女は妻になると約束してくれました。」次の瞬間には、旦那様は部屋を横切って私をウリックの腕から抱き取り、私に接吻した。「善良で魅力的な細君を手にいれたな、ウリック」と彼は言い、深い悲しみに表情を曇らせた。彼が自分の妻を選んだ時のことを考えているのが分かった。奥様も急いで私に近付いた。「ケイト、半分は予期していたわ。貴女はきっと誰かに恋をしていると思っていたから。そんな愛の光を貴女の瞳に見たわ。それがウリックだと分かって本当に嬉しいわ、彼は貴女にお似合いだもの。」彼女は両腕を私にまわし、接吻した。御夫婦は全く視線を交わさなかった。旦那様はひどくほっとした表情であった。「お前の知らせは吉報だ、ウリック」と彼は言い、私に向かつては「非常に良いニュースだ。ようこそ、ケイトノ！」と語りかけた。そうして私は初めて、奥様を見る時には黙許が彼の瞳に浮かぶことに気付いた。私は彼らの優しい歓迎に感謝

し、彼らにとつて本当の忠実な妹になろうと心中で固く決意したのだった。

「でも幼いウィリーのことを忘れてはなりませんわ。私を愛してくださるなら私を行かせてください。きつとすぐに戻ります。恐くありません。看病しなくてはあの幼児は死んでしまいます。」「今回にかぎっては駄目だ！」とウリックは叫んだ。

「行つてはならない。牧師を気の毒だと思ふし、心からあの子を可哀相に思う。だが貴女を犠牲にすることは出来ない。ルドルフ、兄さんは何と仰るおつもりか？」「絶対に行くべきではない」と旦那様が答えた。「その話についてはこれまでだ。」すると奥様が近づいてきた。「駄目よ、ケイト、行つてはなりません。だつて貴女には愛、生命、輝きがあるわ。それなのに私には……、ああ、私にあるはずだつたそれら全てより、貴女はずつと素晴らしいものを手にいれているのだから！ 私があの病氣の子供の看護にあたります。」彼女は期待を込めた表情で旦那様を振り向いた。こぶしを握り締めて彼女は旦那様に近付いたが、彼には触れなかつた。嘗て一度拒絶されたことは彼女には充分過ぎた。「神が私にこの機会を与えたもうたのです」と彼女は言った。「御自分でもお分かりでしょう。ああ、私を行かせて下さい！ 拒まないで、ルドルフ。お願いするのは初めてですわ、あの時以来……。」「黙りなさい！」と彼は言ったが、きつい言い方ではなかつた。「言つてはならない！」「行かせて下さい、ルドルフ！」彼女は叫んだ。「神が私にこの機会を与えたもうたのですから、私をお役に立たせて下さい。ねえ、お分かりでしょう。」そして彼女が彼の側に頭を垂れて、「命には

命を」ですわ。この命を救わせて。是非とも私の命をこれに捧げさせて！ 行つてもいいと仰つて、ルドルフ！」と言つてるのが聞こえた。

だがそれでも旦那様はためらつており、見たこともない表情がその眼に浮かんた。彼は嘗ては彼女を命賭けて愛していたに相違なかつた。「貴女を確実な死へ赴かせてくれ、と言うのか。それが分かっているのか？」「ええ、分かっています。でも一人の命を救えるかもしれない。どうなつても、私は自分の命を捧げます。そしてもし私が死んだら、貴方は私を救してくれるでしょうか？ ああ、顔を背けないで、ルドルフ、愛する人、怒らないで！ 私が死んで横たわつたら貴方は私を赦されるでしょうし、神も私に寛容になられるでしょう。だから貴方の顔を眺めながら死なせてください。貴方からたつた一言、赦す、と言つてもらえるためなら私は百度の死も辞しませんわ……百度死んでも！」

彼の眼には涙が溢れた。彼には口を開く勇氣が無い様に見えるた。「私が暗闇に横たわつた時、貴方から赦しと別れの言葉を告げてもらえるかもしれないと思えば、確実に死んでいくことなど何も恐いことはありません。ああ、貴方、私の生活など生きながらの死に他なりません。ああ、これほど貴方を愛していないければ、これほど苦しみはしませんでした！ 行つてもよくて？」「私が同じことを願ひ出た時、旦那様は即座に却下した。だが奥様が尋ねた時、旦那様はためらつていた。だがその瞬間に私は、彼が全霊を以て彼女を愛していることを知つた。それほど深く愛し合つていたこのお二人の間にどんなことが起こり

得たというのか？ ウリックと私は魂を奪われ、彼らは私達のことを忘れていた。

「考えてもみて下さい」と彼女は彼に言った。「それがどんなにつらいことだったか！ 私の罪を思い出す時、貴方は私が埋め合わせようとした償いのことも思い出すようになるでしょう。ああ、愛する人」と彼女は叫び、わつと泣き出しながら「貴方は生きている以上、もう私を愛せないけれど、死ねば愛せるかも知れないと仰ったわ！ああ、だから私が死ねば：火事か、拷問か、刺されても、もしそうしたら貴方から赦され、貴方のお顔を見ながら死ねたのにノルドルフ、愛する人、行つてもよくて？」彼は間違いなく勇敢な男性だったが、こう答えた時、その眼からは涙が流れていた。「よろしい。」

第XV章

奥様が牧師館に赴いたことが分かると、ちよつとした動揺が館を走った。何が起つたか知つていながら奥様を送り出すなんてご主人様は気が違つたのだろうか、と召使達はお互いに尋ね合つていた。あれほど美しい人を、死の腕の中に投じたのだろうか、と。ハーパー夫人は眼に涙を浮かべて私のところにやつてきた。「こんなかたちで終わりを迎えるだろうと常々思つていました」と彼女は言った。「お分かりでしょう、貴女、奥様はお亡くなりになられますわ。彼女は聖人で殉教者です、誰が異を唱えましょう？」そして本当にこの件についての見解は一致しているようだった。天然痘はウラデルのような美しい街では殆ど知られていなかった。ここで生まれたある貧しい少女

がリバプールに奉公に出ているに感染し、帰郷して以後その伝染が彼女から広まつたのだった。人々は恐れた。愛情や賃金を以てしても、牧師はその館に誰も人手を集めることが出来なかつた。奥様が赴いた後、旦那様は落ち着かず、悲惨な様子であつた。ウリックと私はお二人の間にあつた協議については一切の言及を避けた。それは夫婦間の神聖な出来事であつた。そのことが私達にどれほどの驚きや好奇心をもたらしたとしても、私達は一切それについて口にしなかつた。奥様が出ていった後、私達はウラメルでもとても怠惰に日をおくつた。幸いなことにメイドの一人が怖がらず彼女に付き従つていたので、奥様が一人ではないと安心できた。旦那様もウリックも伝染を恐れてはいなかつた。彼らは日に二三次ずつ、牧師館へ足を運んだ。奥様は決して彼らに顔を見せなかつた。奥様は幼いウィリーの傍らを離れはせず、牧師は彼らを家に入れようとはしなかつた。

日々が過ぎたが、この幼子は悪化する病と引き続き戦つていた。奥様に対する心からの賞賛を、私達は至る所で耳にした。その間にロンドンから看護婦が到着し、館に入ったが、幼いウィリーは彼女に全く懐かなかつた。召使達は奥様が自分の命をあなたの子に捧げたのだと言ひ、幼子はその言葉がどれほど真実であつたかを知つていたのであつた。当初は、全ての医者か匙を投げた。三歳児の悪性天然痘は格別に病状が重いため、彼らは回復に僅かな望みさえも持つていなかった。だが、奥様の看護はとても貴重なもので、もし彼の命を何ものが救えるのなら、奥様の看護をおいて他にはなかつた。後に、側でみていた者達は、奥様がどれほどの看病をし、どんなにあの子供に必死になつて

いたか、長く続いたその病苦をどれほど慰めていたか、日夜を問わずどれほど付きっ切りで、その側で途切れがちに二三時間眠るだけの状態に甘んじていたか、どれほどあの子が彼女に苦しみを訴えかけ、叫び、彼女無しでは決して宥められなかったか、を目に涙を浮かべて語っていた。その言葉がどれほど真実を言い当てているかとは殆ど考えもせず、「彼女は御自分の命をあの子に与えているのだ」と彼らは互いに言い合っていた。それは私達にとって心配な日々だった。旦那様は最も不幸せであつた。遂に牧師館から知らせが届いた。幼いウィリーが決定的に快方に向かった、彼は子猫とケイトに会いがたつていて。手紙を読むウリックの表情は晴れた。「今に幸運な時が訪れてくる。あの子が無事で元気になつた姿に出会えるのが嬉しいよ」と彼は言った。

あの子が危機を脱したと思われ、奥様の看病が全て終わり、あの子が最初に天使達の仲間入りになることになろうなどとは予想もしなかつた時に、奥様が旦那様に宛てて記した手紙を、幾年か後、私は目にした。

「愛するルドルフ、『命には命を』という言葉⁴を覚えておいてですか？ 私はある命を奪い、別の命を救いました。あの子は危機を脱しました。でも私は重く病んでいます。私は家に帰れるのでしょうか、それとも貴方から離れていれば私の償いはより一層完全なものになるのでしょうか？ 覚えていてください、私が貴方のお顔を見ながら死ぬようにと約束して下さつたことを。神がお赦し下さつたと感じています。」

奥様が死の扉に横たわつてることが知れた時、ウラメールは啜り泣きと悲しみに溢れた。日夜、あの子を傍らで宥めずかしていたにも関わらず、奥様は奥様は天然痘にかかつたのではなく、高熱に倒れたのだつた。彼女は病が近付いても何の予防もしなかつた。ある夜、子供を寝つかせるために歌っていた時、倒れたのだつた。あの手紙を書くために彼女は氣力を奮い立たせ、そして全ての氣力を失つた。細心の注意が払われ、彼女は館の東翼の昔の彼女の部屋に運び込まれた。奥様は危うい病状だつた。医師達はそれを風邪か何かと診断していた。私はそれを消耗の為と見て、本當に子供に命を与えてしまつたのだと思つた。彼女の意識はしつかりとして、全ての器官も確かだつたが、ただ力を失つていた。大きな喜びであつたことに、私は彼女の看病を許されていた。だから私は彼女を活気づけるために最善を尽くした。陽光が輝きながら彼女の部屋に差し込んで来た。時に、夏の空気はヘリオトロップともくせいそうで甘やかだつた。鳥が歌うのが聞こえ、風が木々の枝をかき回していた。だが最早、あの恐ろしい幻想も、子供の泣き声の夢も、窓硝子を叩く子供の小さな手も現れなかつた。時々、幼いウィリーのことを彼女は眠りの中で話していた。

ある朝、彼女は私を呼んだ。私は彼女の側に跪き、彼女は私の顔を引き寄せた。「ケイト、私は一目見たときから貴方のことが好きだつたわ。ねえ、貴女がカルモア卿夫人になつてくれるなんて嬉しいわ。」「私はレディー・カルモアにはなりません。私はウリックの妻になるのです」と私は言った。「ルドルフは二度と結婚しないし、私はもう世を去るわ」と彼女は答えた。

「貴女がレディー・カルモアになるのよ、ケイト。私はそれが嬉しいわ。いつ私は死ぬのかしら？ その時が待遠しいわ、ルドルフが彼の腕の中で死なせてくれるかも知れないなんて夢見ているから。お医者様達が私が危篤だと貴女に言ったら教えてね。私が逝つたら、貴女は私について真実の全てを知ることになるでしょう。私が生きているうちに貴女がそれを知ってしまうことには耐えられないの。でも私が死んだら貴女は言葉や視線で私を傷付けることは出来ないわ。」「私が自分から奥様を傷付けるなんてことは決してありませんわ」と私は言った。だが彼女は弱々しく囁いた。「貴女は知らないのよ、ねえ、貴女は私が何をしたか知らないのよ。」「構いません！」と私は衝動的に叫んだ。「あまりにも道理に外れたことなど奥様にお出来になつたはずはない、と確信していますわ。」「そう思う？」と彼女は微かに手を震わせながら呟いた。「ケイト、いつか私のことは全て分かるでしょう。ずっと覚えておいて、それが全て彼の為だつたことを、そして私がそれほど彼を愛していた為だつたことを。忘れては駄目よ。」「

今、私が語っている話の全てを思うと、確かに彼女に出来た最善の処置は、彼女の哀しい秘密を隠し通すことだつたと思う。私のように彼女を愛していた者でさえ、話を聞いた後では、彼女に近付いてキスすることは出来なかつた。彼女がまだ生きていた間、その真実を私達が知らなかつたことは、ずっと良いことだつた。私達が彼女に何を言えたというのか。

ある夕べ、奥様は横になり深い眠りに就いた、と私は思つていた。館中はしんと静まり返つており、静寂を破る音はことりともしなかつた。それは私が寝ずの番の夜で、隣室には看護婦の一人が詰めていた。熟睡していたはずの奥様が、突然目を開け、明るく楽しげに驚いたように微笑した時、私はやや調子が良いのだろうかと思つていた。彼女は肘をついて半身を起こし、ドアを見た。その彼女を見、彼女が話すのを聞いた時によぎつた身の毛のよだつような恐怖は、今、この時でさえ、まざまざと思ひ起こすことが出来る。親しげに挨拶をするかのように明るく微笑んでドアを眺め、彼女は両腕を差し伸べた。「小さなウィリー」と低く弱々しい声で彼女は叫んだ。「小さなウィリー、どうして此処に来たの？」その視線は、恰もドアから彼女の側に動いてきたかのような、ある空虚な形を追つていた。「小さなウィリー」と、彼女は再び叫んだ。「何が貴方を此処に連れて来たの？」彼女はその返事待っているようだつた。「私と一緒に連れに：私を？ 確かに？」再びの間があつて、彼女は言った。「勿論、そうするわ。旦那様に会わなくてはいけないの。そうしたら行くわ。待つてね、小さなウィリー。」「

ウィリーは自分の家において、彼の小さな白いベッドの中でじつと見守られてぐつすり眠っていることを私は知つていた。私は彼女に優しく触れた。「奥様」と私は呼びかけた。「夢を御覧なのですね。」「彼女は私を見つめ、その瞳の中に私は死を見いだした。「夢を見るのではないわ、ケイト。私はすっかり目覚めてるわ。小さなウィリーが見える？ あそこに彼は立っているの、ねえ、あの愛らしい小さな子が。彼は私のために来たと、

私のために寄越されたと言つてゐる。この邪悪な罪深い哀れな私のために！」「奥様、夢を御覧なのですわ。ウィリーは無事に家におりますよ。」「ねえ、彼女には貴方が見えないんですつて、ウィリー」彼女は微かに呟いた。「でも私には見えるわ。私を待つていて。ケイト、旦那様を呼んで。お迎えのお告げが来たわ。」

そう、彼女の瞳には死が宿つていた。多くの涙を流したけれど、今はもう泣いてはいない、その美しい瞳に。私は看護婦を起こし、旦那様とウリックを呼びにやらせた。まさに時は訪れたのだつた。五分と経たぬうちに二人は部屋の中にいて枕の上の白い顔を見下ろし、死の天使が彼女の傍らに佇むことをすぐに見とつた。「私の哀れなネスト！」と旦那様は叫んだ。そして苦い啜り泣きに、彼は膝に沈みこんだ。次に何が起きたかを述べる前に、翌朝一番に私達に届いた知らせは、幼いウィリーが亡くなったというものだったと、話しておきたい。彼は真夜中、急逝したのだつた。

第XVI章

奥様は夫の声に目を開け、彼が頭を垂れた上に手を置いた。

「私が貴方に触れるのを許して下さいさるの、ルドルフ」と彼女は言つた。「今、私が死のうとしてゐるから？ 貴方は赦しと最期のお別れを仰つて下さると御約束下さいましたね。ああ、接吻して下さい！ ああ貴方、私はどんなに貴方を愛してゐたことか！」甘く微かな声が澄んではっきりと部屋に響きわたつた。彼女は愛情を込めた瞳でウリックと私を眺めわたした。「私が

死ぬと、貴方はこの人達にお話し下さるでしょう」と彼女は言つた。「全ての真実を彼らに告げ、彼らの思うように私を裁かせて下さい。罪を犯したにしても、私は苦しみました。いつも貴方のお側に居て、貴方を目にし、同じ空気を分け合い、お名を呼び、それでもあかの他人よりもずっと貴方から隔たつていました。ああ、貴方、それが私には責め苦でした！あの恐ろしい夜以来、私はずっと死んでゐたようなものでした。私は自分の罪を見つめ、あの恐ろしい罪を見つめて喜んで死にます。」

突然に力を込めて彼女は身を起こし、恐ろしいような声で叫んだ、「ああ、貴方の腕の中で死なせて下さい！」「彼女の望みに応えてあげて下さい、ルドルフ」とウリックが言つた。旦那様は膝から身を起こし、忘れもしないような叫び声を上げて、彼女をその腕にかき抱き、奥様はその胸に頭をもたれさせた。

「お顔を見ながら死なせて下さい」彼女は哀しい声で言い、両腕を旦那様にまわして付け加えた。「聞いて下さい、貴方！ この、死の床で私は生涯の大罪を告白します。それは荒々しい、狂うような、情熱的な貴方への愛でした。私は神に捧ぐべきだった愛を貴方に捧げてしまつたのです。私は貴方のために生き、貴方のために罪を犯し、…貴方のために死ぬのです。」彼は身を屈め、—ああ、彼はそうしたので！—彼女の青ざめた唇に口づけた。彼は何か彼女に囁き、彼女は答えた。そして彼女がこう話すのが聞こえた！「私が死んだらすぐに彼らに話して、ルドルフ、貴方が他の人達を呼び入れる前に。」彼女は歡喜の光を顔に浮かべて、しばらく黙つて横たわつてゐた。「やつと…ああ貴方、ついに終わるわ！」と、彼女は言つた。「ルドルフ、

私を赦すともう一度言つて下さい。「赦すとも、愛しい人よ。」彼の声は震え、「赦す。安らかに死になさい。私のように神も貴女をお許し下さるように。」青ざめた彼女の顔に微笑みがよぎり、彼女が祈つていた通り、瞳を彼の顔にひたと当てて彼女は逝つた。

彼は彼女を優しく横たわらせ、殆どの男性には出来ないほど苦く情熱的な涙を流して泣いた。「私は彼女につらくあたり過ぎたのだろうか？」彼は叫んだ。「私は彼女を残酷に裁き過ぎたのだろうか？ 私ほ冷酷過ぎたのか？ ああ、ネスト、全てがもう遅い！」遅過ぎた！ 彼女の耳はいかなる人間の声にも閉じられてしまつていた。愛や後悔、熱情や悲哀、などの言葉は二度と彼女に届かなかつた。「失われ、壊され、荒れ果てた生命！」と彼は言った。「ああ、ネスト、若く幸福だつた頃、どうしてこんなことを想像したのだろうか！ 慈悲が最善だつた。私は——私ほもつと寛容でありたかつた。だが彼女は自分の望み通り、逝つてしまつた。」

ウリックと私は黙つて立ちつくしていた。旦那様は死んだ彼女の側に跪いており、その悲しみの情に、涙無くして思いを馳せることは出来ない。長い年月封じられていた愛はその時彼女に惜しみ無く注がれたのだつた。彼は白い額と金の巻き毛にキスし、あらゆる愛称で呼びかけた。そうしたたつた一つの言葉さえ、ほんの少し前ならば彼女の全霊を喜びに溢れさせたはずであつた。今、その白い顔は動かさず、ため息をついて懇願し、祈つていたその唇は永遠に結ばれていた。「ケイト」とウリックが囁いた。「出よう。彼を此処に一人にして行こう。」しかし

旦那様は泣きぬれた眼で私達を見上げた。「いけない」と彼は言つた。「まだ行かないでくれ。彼女が何と言つたか知つているだろう。彼女が死んだらすぐに私は彼女の話をすべきだつたのだ。今、お前達にそれを話し、彼女と共に埋めてしまおう。」そうしてそこに立ち上がり、死んだ妻の手を固く握つて旦那様は彼女の生涯と罪について私達に語つた。

ルドルフとウリックの父、ジョン・カルモア卿は三人の息子をして亡くした。それは後を継いだ長男リチャード、当時陸軍大尉であつた次男ルドルフ、そして街で法廷弁護士として生業を立てていた、私の恋人である三男ウリックであつた。ジョン卿が亡くなると後を継いだ長男は、ブルツクのリチャード・カルモア卿となつた。彼は親切で寛容な人間で、弟達によくつくした。ルドルフ・カルモア大尉とウリックは余暇の殆どをブルツクで過ごした。大きな情愛と言うよりは最も優しい愛情が、彼らの間には流れていた。彼らはお互いにとてもよく似ていた。彼らは長身で色の浅黒い端正な美貌の持ち主で、気品があり寛容だつた。年若い二人の息子達にはほんの僅かな世襲財産しか譲られなかつた。ルドルフは彼の貯蓄の大半を、倍にしようとして望んで投機に費やしていた。ウリックは必死で自分の仕事をしていた。寛容そのものの人だつたりチャード卿は、二人の弟達にかなりの手当てを支給すると主張した。彼らは受け取ろうとはしなかつたが妥協することになり、長兄が結婚するまで受け入れることで合意した。結婚すれば長兄自身にそれが必要になるだろうというのが弟達の主張だつた。

そうして事が運ばれ、彼らは皆、幸福だった。そしてとうとう、リチャード卿はロンドンを訪ねていたうちのある時、レディー・ヘーゼルウッドの娘のエセルと恋に落ちた。ルドルフ・カルモア大尉は、婚約者に対する熱狂的な兄の表現に好奇心を掻き立てられて彼女に会いに行き、途端に彼女の従妹にあたるネスト・ヘーゼルウッドの虜になった。ネストは孤児で、両親が亡くなった折りにレディー・ヘーゼルウッドの養女となっていたのだ。リチャード卿は喜んだ。丁度その頃、大尉の連隊が外国への駐屯を命ぜられる事になるという、ある採決が為されたので、その厳然たる事実の前には、他の障害は差し置いて、卿の急な結婚について何も言うことはなかった。だが、エセル・ヘーゼルウッドと共にブルック領を継ぐことには何の問題もなかった為、この重要な儀式は滞り無く執り行われた。花嫁は美しく、女王のように、端正で、優雅で、威風堂々としていた。彼女は情熱的な愛情を彼女に注いでいる夫と深く愛し合っていた。二人の弟は結婚式に出席した。ネスト・ヘーゼルウッドは花嫁の付き添いの一人だった。儀式は大変な「華々しさ」のうちに進化した。幸福な花嫁と花婿は大陸に向けて発ち、六週間の留守の後、物々しい様子でブルックに帰郷した。ネストは従姉との同居を主張し、二三个月のうちに恰も「結婚式の鐘のように」全てが楽しく過ぎた。大尉は、彼の連隊の立出についてそれ以後の通達がないままに、引き続きブルックに留まった。カルモア大尉には俸給しかなく、——と言うのも彼は私産を失っており、ネストにも何の蓄えもなかったのでおそらくは彼らの結婚まで数年の月日が要されるようだった。長兄のリチャー

ード卿はルドルフにかなりの援助を申し出た。彼は自分の収入を弟と分有しようとしたが、大尉は断った。彼は、リチャード卿が結婚し、財産を継がせる子供もできるだろう今となつてはそれは正しいことではない、と主張した。ネストと自分は真に愛し合っており、待つことに不安はない、ただ最善を尽くし必死で働いて昇進せねばならない、とも言った。大尉はヘーゼルウッド嬢を激しく愛していたが彼女よりも理性的で、結婚の延期を、嘆く必要の無い必然とみなしていたが、一方彼女はそれをとても残酷な運命と考えて口には出さず悩んでいた。

第XVII章

リチャード・カルモア卿夫妻の一年余りの結婚生活は、ある恐ろしい悲劇によつて終止符を打たれた。リチャード卿は銃の暴発によつて亡くなった。弾丸は彼の心臓を貫き、即死だった。恐ろしい驚愕と嘆きが走った。弔電が急いで打たれ、その夜には二人の弟がホールに到着した。悲しみを言い表す言葉もなかった。リチャード卿は遺言を遺していなかった。しかし長時間をかけて弁護士と協議し、カルモア夫人自身に話を聞いた結果、全ては伝統通りに執り行われることになった。カルモア夫人は嘆きのさ中においてさえ、ずっと絶望しているわけにはいかなかった。と言うのも二三个月のうちに彼女は子供の母親となるからだ。もしその子が男の子なら当然のこと乍ら、彼が称号と財産の全てを継承し、女の子ならカルモア大尉が後継者となるのだった。大尉自身は品位をもつて振る舞った。彼ほど、この若い未亡人への親切を尽くすことは出来なかった。彼は彼

女にブルック・ホールにとどまるように、そして好意と関心をいつも彼女に注いでいくと主張した。彼は彼女を訪れ続けた。彼は最愛の兄にしかできないほどの、彼女に親切にし献身的につくした。ネスト・ヘーゼルウッドもまたこの不安な時期を従姉と共にブルックで過ごし、手伝いとして随分彼女に尽くした。

時々、ネストが、恋人と自分自身との運命とに逆らうことがあった。「ひどいわ」と彼女は彼に言った。「あの小さな子が、貴方とこの莫大な相続財産との間に立ちはだかることになるなんて。」しかし大尉は彼女に微笑みだけで、この件に関しての立場について何も答えなかった。兄の妻と子供は彼にとつて神聖なものだった。例えごく僅かの失望を感じていたとしても、彼はそれを決して表には出さなかった。だがネストはいらだちをなかなか隠せなかった。そうして待ち望まれた数週間が過ぎ、遂に、カルモア夫人は男子を出産し、後継者を得たことを祝福される時が訪れた。大尉は赴き、この若い母親が死亡する一時間前に側に着いた。彼女はただこの子をルドルフの腕に抱かせる為だけに生き長らえていた。「この子をパーティーと呼んで欲しいわ」と彼女は言った。「そしてこの子を貴方に―貴方とネストに託していきます。」彼ら二人は彼女の傍らに跪いた。彼女はそれぞれの手をとり、自分の手の中に握り締めた。「私があなたがたお二人におく以上に神聖な信頼はないわ」と彼女は言った。「私の小さな息子を大切に。あなたがたに預けていくわ。あなたがたの本当の息子のようにして育てて。ルドルフ、貴方はこの子の財産を管理してくれるでしょう。広大なブルックの土地が彼のものになるのは随分先でしょう。ネスト、

貴女は私の姉妹同然だったわ。私の子供を大事にして。結婚したら私の子供の保護者になるために此処に住んで頂戴。」そうしてそこに跪き、彼らはその子を自分たち自身の子として愛し、大切にすると誠意をもって彼女に約した。

後の顛末は、且那樣の話した言葉の通り、話していこう。彼は彼女の寝台の傍らにじつと跪き続けており、その慟哭の嵐は過ぎ去っていた。

「ケイト、その若い母親が子供を私の腕に遺して死んだその瞬間から私はその子をとて愛していた、と話せば、貴女が恐らく私を一番良く理解してくれるだろう」と彼は言った。「跪いて兄の息子の小さな顔にキスし、忠誠と誠意ある支援とを約束したと話すことを私は恥じはしない。私自身のもののように彼の財産を管理しておく事を約束した」と彼は続けた。「ブルック領主アルバート・カルモア卿」と、この赤ん坊の継承者に軍隊式に敬礼して私は言った。我々はあの子を、あの子の母親が愛情を注いで準備していた育児室に入れた。我々は幼いパーティー卿を物々しく扱った。彼のために乳母が雇われた。背の高い太った女で、いつも膝の上に小さな白いフランネルの束と白いレースを置いて暖炉の側に座っていた。名前はマーサ・ジェニングスと言った。「この子は丈夫かね？」と私は尋ねた。「この年どうして分かりましょう、且那樣？ 可哀相にこんなに小さいのにお母様を亡くされて。」私はネストの肩に両手を置き、「この婦人がこの子にとつて最良の母親になるだろう」と言った。だが乳母は首を振った。「子供にはたった一人の母親

しかおりません、旦那様。」ネストは子供にキスしようと身を屈め、「私は貴方の愛する母親になるわ、赤ちゃん」と言った。そうして私は天国にいるあの子の母親が、私とネストという二人の保護者に囲まれて寝ているこの美しい子供を見ることが出来るのだろうか、などと思っていた。ああ、哀れなネスト！」

「カルモア夫人は夫の隣に葬られ、私は休暇の延長を軍隊に願ひ出た。遺産の相続人ではないにしろ、私はその代理人で、幼い子供と彼の利権の世話人だった。請暇の届けは受理され、私は忙しくなった。為すべき遺産関連の整理事項はかなりあった。出来る時にはウリックが手伝ってくれた。私は愛らしい甥を愛するようになり、私の指揮官などと呼んでいた。私は彼の寝ている綺麗なベビー・ベッドの側に跪き、彼のために祈るのが常だった。私は朝夕にそこに近付くのが好きだった。亡くなった兄の遺児であるこの後継ぎの赤ん坊への、優しく強い愛情が私の心の中で育っていた。確かに、この幼い子は私から称号も、土地も、財産も奪ってしまった。だからといって、少しでもその愛情が薄れるようなことは無かった。私とそのベビー・ベッドの側に跪き、小さな手にキスするのを見ると、乳母は微笑んだ。彼女が私にこう言ったある日のことを、私はいつも好んで思い出す：『貴方は良い方ですわ、旦那様。失礼ですけど、中にはこんな財産と御自分との間に生まれ出てきた子供を憎む殿方もいらつしやいますからね。』」

「私が笑ったのは、そんなことは馬鹿げた卑しむべきことのように思えたからだだった。自分の実の兄がその父親にあたる、こんなに愛らしくか弱く小さな生きものを憎むとは！ ああ、

まさか！ それどころか私は彼を愛し、秘蔵っ子にしていた。ある朝、ネストと私が小さなベッドの傍らに立っていた時、彼女は私にこう言った―『なんて儂い、か弱い生命なんでしょう！これが貴方と財産との間に立っている全でだと思おうと！』私は上向き加減の彼女の美しい顔にキスした。『そんなことを思うものではない、まして口に出してはならない』と私は言った。『でも随分変なことだわ、ルドルフ』と彼女は言い張った。『こんな小さな子供が貴方から全てを奪ひ去るだなんて。』昔は我々は皆、小さな子供だったのではないか』と私は応じた。過酷に見えた我々の運命に、ネストが時々、泣いていたのは私も知っていた。まだ、いつ結婚できるかの見通しは全く立っていないかった。』

「ある朝、ミセス・ジェニングスがあの子の体調が思わしくない、と話した。そしてその少し後、従軍中でないにもかかわらず、我々の隊の外国への駐屯命令が司令部から届いた。この知らせは、ネストには殆ど致命的打撃だった。彼女は私にしがみつき、可哀相に激しく泣いた。行つてはならない、と彼女は私に言った。私が彼女から離れば彼女はきつと死んでしまうだろう、と。私は彼女を宥め、落ち着かせた。私が去つても彼女はここに留まり、幼い後継者の面倒を見なければならぬ、と私は彼女に告げた。別れを思った彼女の苦悩を私は決して忘れることはない。』

「話の結末を急ごう。子供の状態はその日のうちに悪化し、翌朝逝去した。医師はこの子はひきつけて死んだのだと言い、この幼児はとても繊細なのでこの子が生きるだろうとは思って

いなかつたと付け加えた。乳母は悲しみに打ちのめされていた。その時にはあまり、そう思わなかったが、子供のことを話したとき彼女が決して私の顔を見なかった事が後々心に引っかかった。幼い継承者は死んだ。彼を傷つけないなどは考えたことさえなかったこと、一瞬たりとも彼の富裕な相続を恨んだり、彼が私の邪魔になるなどと感じたりせずにすんだこと、をこの幼子の傍らに立つて、私は神に感謝した。」

ルドルフ卿は暫く、妻の死に顔にじっと見入った。そして再び私達へと向き直った。

「子供が死んだ時、ウリック、お前は覚えてるだろう、私はすぐにお前に知らせを送った。私は称号と遺産を相続した。私は子供を哀れに思った。だがあれはそんなにも儂い命だったので、ひどく嘆いたりはしなかった。我々はあの小さな子を葬った。ネストはその時、伯母のもとに戻っており、我々の結婚までそのままそこに留まつていることになった。彼女が乳母のマーサ・ジェニングスを一緒に連れていくと言い出した時、私はそれを特におかしいとは思わなかった。あの女は彼女に随分愛着を感じていると言い、一方でネストも彼女をかなり頼りにしているようだった。私の小さな甥のために彼女はこの乳母が好きなのだろう、あの子に結ばれた、女だけに理解できる絆が彼らの間にあるのだろう、と私は想像していた。」

「時には、一連の死によつて引き起こされた暗雲が我々の上にのしかかつて来たが、その後、次第に我々は過去を冷静に振り返ることを学んだ。我々は若かつたし、私は妻と一緒に居られて言い表せぬほど幸せだった。彼女がどんなに私を愛してい

たかは、お前達二人とも知っているだろう。私ほど愛された男はこの世にいないだろうと思う。」

「最初に不快を感じたのは、ネストがどんなにあの乳母の言いなりになっているか気付いた時だったのを覚えてる。それにあの女の彼女への態度がまるで私には気に入らなかつた。一度ならず、私は妻が涙にくれているのに気付いたが、理由を尋ねると彼女はごまかしの答えて私をはぐらかすのだった。だがこれらが、来るべき真実への疑問の光りを私に投げ掛けたりすることの無いただの些事であつたのは、神のみが御存じであつた。」

「私は」と、ルドルフ卿は続けた。「お前達に後の話を告げるように強いられていなければどんなによかつたかと思う。私がそれをするのは彼女が望んだからであり、今彼女は亡くなつてしまつたからだ。出来ることなら彼女の秘密は彼女と共に葬り去りたい、哀れに誤り導かれたネストと共に！」

「ネストに対して不満を感じたこともあつたと言わねばなるまい。彼女は随分変わつてしまつた。そんな余地が残されていたとして、彼女はそれまで以上に私を愛しているようだった。彼女はほんやりとして、自信をなくしたように見えた。」

「クリスマスの一週間前、ミセス・ジェニングスは急病になつた。ネストはひどく悩んでいるようだった。我々はエイヴオンスレイから医師を招き、彼女は重症と診断された。当初は誰も彼女の病を重くみておらず、我々も友人の前でも何も話さなかつた、——と言うのも館は客で溢れていたからだ、——彼らを神経質にさせたくなかつたからだ。メイドの一人が彼女を看病して

いたが、我々は楽観していた。クリスマス・イヴの朝九時、私はイングリッド中の他の人々と同様、ただ幸福だった。その日の予定を客と共に立て、私は朝食のテーブルから立ち上がった。従僕が丁度やどりぎの大きな枝を飾っていたホールでネストとは出会った。私は小枝を取り上げ、ネストの髪に飾った。その時ほど、彼女が美しく見えたことは無かった。私に向けた愛らしい微笑み以外何も浮かべたことの無い唇に私がキスした瞬間、例の病人の女に付き添っていたメイドが私のところにやって来た。」

『旦那様』と彼女は声をかけた。『ミセス・ジェニングスが是非おいでいただきたい、と言っております。病状はひどく悪く、彼女はお会いしたがっているのです。』

「妻の表情が恐ろしい変貌を来したのは、私がすぐに行くと言おうとした時だった。彼女は一瞬気絶するのではないかと見えた。彼女は私の手を握り締めて言った―『行つてはいけないわ、ルドルフ。女の馬鹿げた、ただの妄想よ。』『気の毒な人を拒むことは出来ない。行かねばならない、ネスト!』『いけないわ!』彼女は絶望的に叫び、私が身動きできないほど必死でしがみついていた。『どうして私を彼女に会わせたくないのだ、ネスト?』と私は尋ねた。『彼女はひねくれていて悪意を持っているのですから』というのが答えだった。『彼女は貴方に何か言うでしょう。彼女は狂った妄想をしているわ。ああ、愛するルドルフ、どうか彼女に近付かないで!』

「彼女の態度には驚くべきものがあつた。私にはそれが理解できなかつた。彼女は自分自身を恐れていたのだろうか、それ

ともこの私を?」

「死にかけている女の頼みを断ることは出来ない。』嘗て無いほど断固とした調子で私は彼女に言った。『だが貴女も一緒に来ればいい、ネスト。』彼女は震えながら後退した。『いいえ、いやです!』と彼女は叫んだ。『では私一人で行かせてくれ、そして私を信じていなさい。』私が側から離れた時の、彼女の絶望の表情は忘れもしない。その唇からもれた叫びも。『すぐ戻るよ、ネスト。』

「病人が寝ていた部屋は知つていたので、私はそこへ急いだ。あの乳母は危篤だった。使用人が一人彼女の傍らに座つていたが、この病人は哀願するような表情で私を見て『この人に席を外させて下さい、旦那様。私は貴方様にお話したいのです。』と言つた。使用人は出ていき、我々だけが取り残された。『旦那様、これから私が話さねばならないことが貴方様の御心を打ち砕いてしまうのは分かつています。言わずに死のうとしました、できませんでした。この秘密を秘めたまま死ぬわけには参りません。私は：私は真実を告白します。』『確かに、何が気にかかるとは知らないが、私に話した方がよからう』と私は言つた。『ああ旦那様』と彼女は憐れむように言つた。『この話は貴方様の御心を引き裂くでしょう! 貴方様は二度と幸せにはなられませんまい：私は貴方様をあまりにもよく存じ上げております。それでも、お話しせずに死んだら私は墓で決して眠れないだろうと思うのです。私は安らぐことが出来ません。貴方様にお話しするために死から立ち戻るようになるでしょう。』『今、話しなさい』と私は言つた。というのも彼女の言葉は、ある種

の耐え難い恐怖を私の心に掻き立てたからだ。―『すぐに話しなさい！』彼女は私に近づくように手招きし、私はそうした。彼女は手を持ち上げ、私は彼女の唇の側に耳を寄せた。『大きな声では言えませんが』と彼女は言った。『壁にさえ耳あり、で誰かが聞くかも知れませんから。私が話さねばならないことは、貴方様が誰にもお話しなさってはならない宿命的な秘密です。別の命がそれにかかっています。旦那様、貴方様の奥方、カルモアの奥様はあの相続人の赤ちゃんを御自身で毒殺なさったのです。』

「私は言い様の無い嫌悪と恐怖を感じて彼女から飛び退いた。私の美しく優しいネストがああ幼くいたいな赤ん坊を殺したのだと！ 私は怒りに溢れた。『たわごとだ！』と私は叫んだ。

『狂った、ひねくれた妄想だ！』『旦那様』と彼女は静かに言った。『真実です―はつきりとした純然たる真実です。お話しした今、私は安らかに死ねます。神が我々の上においてなのと同じほど、奥様があの子を殺されたのは確かなことなのです。彼女がそうなさるのを、私はこの眼で見ました。お話ししておきます。旦那様御自身で裁きなさることで。』

「どうしようもなかった。私は聞くことを強いられ、恐れ始めた―ああ、どんなに恐ろしかったことか！』

『覚えておいででしょう』と彼女は言った。『あの子は病気にばかり、私達は根気強く看病をしましたが、ミス・ネストほど優しく親切にした者はありませんでした。あの子が亡くなった夜、私達は心配でしたが、私が夕食をとりに行っている間は御自分がベビー・ベッドの側に座っていると、ミス・ヘーゼル

ウッドが仰ったのです。私は喜んでそうしました。あの子が大夫夫か見に行くくと、ぐっすりと眠っており、私が思うには快方に向かったように見えました。小さな愛らしい顔も前より血の気がさして見えました。部屋を出ようとした時、旦那様、私はミス・ヘーゼルウッドの奇妙な表情に衝撃を受けました。表現できませんが―残酷な表情のように思えました。私は階下に降りましたが、ミス・ヘーゼルウッドの表情が私の脳裏から離れないのです。不安があつた訳ではありません。私はミス・ヘーゼルウッドよりも、むしろ子供に害を為す悪霊を想像していたのです。私は階下で落ち着けませんでした。私は引き返しました。するとミス・ヘーゼルウッドが揺りかごの側に膝をついていました。彼女は片手に小さな瓶を持ち、もう片方の手には匙を握っていました。そうして私は彼女がしっかりとした手つきで瓶の中身を匙に二振りするのを見ました。私が部屋を横切り、何か言うことが出来る前にあの子は匙の中身を飲んでおりました。私は彼女を、言ってしまう殺人罪で捕まえました。彼女はあの子に致命的な一服を盛ることにあまりにも熱中しており、私の姿や入ってきた物音に気付いていませんでした。私は進み出ました。《何をしておいでなのですか？》と私は叫びました。一瞬彼女は恐怖で麻痺したようでした。《何をしておいでなのですか？》と私は殆ど我を忘れて再び叫びました。《赤ちゃんに薬を飲ませていたの》と彼女は言いました。《丁度、時間だったから。》彼女は瓶を隠そうとしましたが、私はそうさせず、もみ合っているうちに彼女はそれを落としました。中身は枕に零れ出しました。私はその瓶を拾い上げました。そのラベルには恐

ろしい一語が：『毒』と。《貴女はこの中身をティー・スプーンに垂らしましたね！》と私は叫びました。《罪深い、あさましい女だわ、貴女は子供を殺したのよ！》彼女は否定しませんでした。彼女は私の足元に崩れ落ち、はいつくばって、こんなにも儂く小さな命だったのにそれが貴方様と彼女を引き裂いているのだと叫びました。彼女は泣き叫んで私に抱きついてきました。貴方様の連隊が外国への駐屯を命ぜられたこと、そして貴方様が戻られ彼女と結婚されるのはずっと先で何年も後の話になること、でももしこの子が死んで貴方様が準男爵を継ぎなさると軍を退役なさらねばならず彼女とすぐにも結婚出来ること、などを彼女は私に話しました。《それに私はあまりにも彼を愛しているの》と彼女は悲しげに叫びました。《とても深く私は彼を愛しているわ！》彼女に繰り返したのはそれだけでした。『私は彼をととても愛しているわ！』旦那様、あれは恐ろしい情景でした。子供は既にそのベビー・ベッドの中で死んでおり、蒼白になった絶望的な表情の美しい婦人が床に蹲っているのです。《彼を行かせたりなんて出来なかつたわ！》と彼女は呻きました。《彼はとても誠実で、高潔で、良い人だつたわ。彼は私をととても愛してくれた。誰もが繁栄を好むわ。どうして人生最良の時を私達はずっと別れて過ごさねばならないの？私がかから愛しているあの人は外国で死ぬかもしれないわ。それはただ、この小さくてとても儂く、あまりにも弱々しい命が彼と財産との間に立ちふさがっているからなのよ。》彼女はあの子の上に身を伏せました。《見て》と彼女は叫びました。《もう苦しんではいないわ。ほんの短い間、息をして、死んだわ。

数分前、この子は弱く、苦しんでいる小さな生きものだったけど、今は空で輝く天使なのよ。私はひどく間違つたことは犯していないわ。小さな魂は自由にしてやり、私は恋人と別れる必要が無くなるわ。幸運と、富と、彼を熱望している私の心とを彼に与えられるのだわ。《法律の解釈は異なることでしよう、ミス・ヘーゼルウッド》と私は言った。《神の御前に等しい法律上は、幼い子供の命は成人の命と同様、重んじられるべきものです。》

『お分かりでしょうか、旦那様。その時点まで彼女が自分の行為を殺人とみなしていたとは思えません。彼女は単に、旦那様、貴方様と財産との間に――そして彼女自身と彼女の恋人との間に横たわる障害を取り除けたと考えていただけなのです。法の効力のもとに自分自身をさらけ出すということなど、彼女は考えてもおりませんでした。彼女は殺人罪を犯し、当然、絞首刑になると私が告げた時の、あのお顔さえ御覧になっていれば！』『今だに信じられない』と私は叫んだ。『後ろを御覧遊ばせ、旦那様』と彼女は言った。『真実はそこにお読みになれましよう。』

「彼女が指差す方向を見ると、ぞつとするような恐怖の表情を浮かべ、絶望的な恐れを瞳に宿した妻が其処に立っていた。私は感情を抑えて彼女に向き直つた。『本当なのか？』と私は尋ねた。すると彼女は膝をつき、すくみあがつて叫んだ――『そうよ、本当です！』」

「私には言い表せない」と旦那様は続けた。「私の恐怖感を。あの衝撃以後、私はすっかり人が変わってしまった。一時間の

後、私は不幸な妻と共に彼女の私室に立つていて、今この時を以て別れ、二度と顔を合わせないようにしようかと結論づけた。

私は彼女をととても深く愛していた。だが彼女がああ愛らしい子供の命を奪つたことを知ると、嫌悪が愛情に取つてかわつた。私は彼女に、重々しく慎重な言葉で、今夜別れて二度と出会わないようにしようと言つた。私の心の葛藤は激しく、彼女を法廷と彼女を待ち受けるべき運命とに送り届けたと思う、と私は彼女に話した。だが彼女は女性で、私の妻だ；私は彼女が絞首刑になるのを見るに忍びなかつた。二つの罪、——というように私には感じられたのだが、——殺人者を匿う罪、及び、私のために罪を犯した我が妻を法に照らして裁きを受けることを放棄した罪、との狭間で私は逡巡していたのだつた。」

「これが彼女の話の顛末だ。お前達は彼女をどのように裁くのだろうか？」

自己防衛を嘆願したのであろう唇は永遠に結ばれ、あれほど多くの苦い涙を流した眼は永遠に閉じられていた。彼女を狂わせたその情熱と愛情、その哀しみ、絶望、忍耐、苦悩について彼女は今、私達に何も語ることは出来なかつた。彼女は黙して横たわつていた。神が彼女をお裁きになるだろう。どうして私達が裁いたり出来ようか？

ルドルフ卿は身を屈め、熱い涙を溜めて彼女にキスした。「誰が彼女を裁き得よう？」と彼は尋ねた。誰も答えなかつた。「彼女の手にどんな花を飾つてあげるのかな、ケイト？」とウリックが優しく言つた。ああ、それは無垢な白い薔薇でも、罪の赤い花でも無い！彼女の金髪とその黙した胸と白い両手に、

彼女の真実を最も象徴する、紫色の情熱の花を私は飾つた。

今、私はレディー・カルモアである。というのもルドルフ卿は軍隊に帰軍し、イサンドラで戦死してしまつたからだ。その後、ウリックは法廷から退き、私達は結婚してブルックに移り住んだ。愛らしい幼い子供と若いその母親、麗しきネストの記憶は、今では薄れかけた。だが、結婚後も夫というよりは恋人であるウリックは、やどりぎを見ると白い漿果がその上に落ちてゐる涙に見える、と言ひ、クリスマスの時期にはそれを私達の側に置くことはない。

だが、やどりぎが涙をおこうとも、柊の真紅の漿果は昔のままに赤い。そして緑の月桂樹と共にその赤い漿果は毎年変わらぬ幸福の物語を告げ、私達にいつも変わらぬ祝福を囁いてゐようだ——「メリー・クリスマス、そして新年おめでとう」と。

(二完)

付記

ここでの登場人物各々の名前は、尾崎紅葉の『不言不語』とは直接關係を持たないが、『不言不語』を同作の翻案と措定するならば、語り手のKateという名が、アレクサンドリアのカタリナ (Catherine of Alexandria, ?-307) に流れを汲むことは興味深い。キリスト教十四救難聖人の一人であつた彼女は、女子学生の守護聖人としてその知性は、現在も11月25日の「キャサニング」において讃えられている。車輪による拷問を奇跡によつて免れたことから釘を打つた車輪が彼女のシンボルであるが、奇しくもこの日は用意する料理や食卓、歩き方に至るまで身の回りの事象全てを「環」にするべく、丸みを帯びさせて過ぐす日とされている。紅葉がそれと知つて『不言不語』の語り手の名を「環」と選んだかどうかは定かではないが、

不思議な関連である。

なお作品の原文に一部フランス語表記があり、当時の出版国の文化背景などに鑑みただであろう原作者自身の一種の恣意性は感じられたが、ここでは特に注は省いた。

注

- (1) 原文はthingであったが、文脈上、パンフレット版のthinkを採った。原文は誤植と考えられる。
- (2) "Hanging was the worst use a man could be put to." (この一節はSir Henry Wotton (1568-1639) の *The disparity Between Buckingham and Essex* (1651) からの引用であり、Bartlett, John の *Familiar Quotations* (1855初版) に記載があることから) よく知られていた背景が窺える。
- (3) 「目には目を」で始まる高名なこの一節は、『旧約聖書』申命記第19章21節において「命には命をもって償いなさい」と結ばれるが、同様の箴言は『旧約聖書』出エジプト記第21章23節、及びレビ記第24章20節にも記されている。
- (4) (一)と同様、原文のwardsをパンフレット版のwordsに換えて訳した。